

## 議 事 録

- 会議名 第14回佐賀県総合教育会議
- 開催日時 令和元年5月13日（月曜日）10時30分～11時30分
- 開催場所 佐賀県庁新館4階 プレゼンテーションルーム
- 出席者 山口知事、白水教育長、牟田委員、小林委員、加藤委員、  
飯盛（清）委員、飯盛（裕）委員  
（知事部局）大川内部長  
（総合教育会議事務局）林政策総括監、種村政策課長、他
- 議題 （1）佐賀県教育大綱2019（案）について  
（2）その他

### ○議事録

#### 1 開会

（林政策総括監）

これより第14回佐賀県総合教育会議を開会いたします。私、本日の会議の進行を務めます政策部政策総括監の林と申します。よろしくお願いいたします。

本日は知事、教育長、教育委員の皆さまのほか、大川内政策部長が出席をしております。また、議事の関係から事務局の種村政策課長が同席をしております。

それでは、開会にあたりまして知事から御挨拶をお願いいたします。

#### 2 あいさつ

（山口知事）

みなさん、おはようございます。今日は、この佐賀県教育大綱2019（案）についてということで、前回の時も幅広く議論をさせていただきました。そして、その後も、様々ないろんな県民の皆様方の意見を聞いて進めようとしているわけですが、我々として一番今回考えたことが、新しい時代にこれからの子どもたちにどのように生きていてもらいたいかということです。

振り返ってみると私が昭和40年生まれですけど、昭和40年代というのは高度経済成長期であり、右肩上がりでも人口も増えていってました。自分の小学校時代を考えると、クラスがどんどん膨らんで4年生の時は6クラスになって、いわゆるプレハブ校舎というのが校庭にありました。我々は、だんだん豊かになっていくこの国を見ながら、どうやって生きていくのかという羅針盤というのは、学校の先生にどう従って、みんなが同じに、画一的にどうやっていい生徒になっていくのかな、ということを実際に探し求めていたような気がします。ちょうど「塾」というものがいっぱい出来てきた頃で、少しでも成績を

上げたほうがいいんだとか、当時は、発達障害という言葉がなくて、それぞれ頑張れ、頑張れ、みたいな感じで、みんな多様性というのがほとんどなくて、右向け右という感じだったと思います。そして最近はスポーツという世界もあるけど、昔は体育ということで、頑張れ！水飲むな！うさぎ跳び頑張れ！鉄棒やれるまでやるんだ！努力が足らん！そんなような中で、たまに太ももを竹で叩かれたりしました。でも、そういう時代を生き抜いてきたということからすると、時代は大きく変わっています。

社会を見ている、これまでそうやって経済的に豊かになろうという統一のスローガンの元で画一的にやっ行ってこうということではなくて、本当に新しい時代というものがどこに向かっていくのかという荒波の中で、子ども一人一人が自分としての考え方というものをしっかり持ちながら、そして、社会はその多様性を認めて幅広くそれを受容しながら、みんなが本当に明日に向かって生きていけるような、そういう多様性の時代になっていくというふうに思います。これからは正解がない世界に入ってくるだろうと思います。今までは、一つの要領のようなものに縛られて、その通りにやっっていくという所が一つのマインドだったのかもしれないけれど、これからは何かアイデアを出したり、何か決めごとをする時に、いろいろと自分たちで仮説を出し合っ、こうやってみようか、そして、やってみよう、修正をしながら遅く前を向きながら、個人としても組織としても生きていくような、そんなような時代になっていくというふうに思います。

そういったことで、県としては維新博をやっ、自分たちが育っているこの佐賀という土台がどうなのかと今一度見つめてもらいたいなっということと、少しでも何か感じるものがあっほしいなっということで開催しました。

そして、私たちが子どもの頃と違うのは、世界中を行き来するような時代にもっともっとなっっていくと思うので、そういう中でも、グローバルズムと、ローカルの私たちが育った佐賀というものへのこだわりという中で何か感じ取ってもらいたいなっと思います。それは私たちが押し付けるものでは決してなくて、生徒それぞれが感じてもらうことだっと思います。言い方が難しいですけど、そんなようなことを私たちは考えて、これから教育というものを、佐賀県にとってはお家芸であるけれど、お家芸であるから教育を一生懸命大事にしたいと思う必要があるけれど、今までの昔のやり方をそのまま踏襲したらいい訳ではありません。ですから、我々自身も、この総合教育会議もどうあっ方がいいのかなと、お互いで意見交換をしながら、試行錯誤もあると思いますけれども、いい道をみんなで作っり上げていっ、結果的に佐賀で作っり上げた教育の在り方というものが、非常に素晴らしいものになっっていくというようになっしてほしいなっ心から思っっております。

いろいろ意見の違いがあっ構いませんので、それぞれ意見を出し合いながら、より良いものを作っていただきたいと思っっております。ご意見を賜りたいと思っっております。よろしくお願いいたします。

### 3 内容

#### (1) 佐賀県教育大綱 2019 (案) について

(林政策総括監)

それでは、本日の議事に入ります。本日の議題は「佐賀県教育大綱 2019 (案) について」とさせていただきます。前回 3 月末の総合教育会議で皆様からの様々な思いをお聞かせいただきました。その意見交換をしていただいた結果を踏まえまして、今回 (案) を作成しております。

まず、事務局から策定案を説明し、それから意見交換に移りたいと思います。よろしくをお願いします。

(種村政策課長)

政策課長の種村と申します。佐賀県教育大綱 2019 (案) についてご説明いたします。資料は右方に会議資料としているものです。パワーポイントも合わせて映しだしております。

資料 3 ページ、前回 3 月 25 日の総合教育会議におきまして、教育大綱の構成案をお示しいたしました。それから意見交換をしていただきまして、委員の皆様からたくさんの貴重な御意見をいただいた所です。それらの御意見を踏まえまして教育大綱 2019 (案) の取りまとめを行いました。それを本日提示させていただきたいと思います。

資料の 5・6 ページに策定の趣旨を記載しております。

令和という新しい時代は、グローバル化・ICT化でいいます第 4 次産業革命の進展、それから人口減少や少子高齢化のさらなる進行ということで、これまでの常識があてはまらない予測不可能な未知の時代であるということと、このような中、若者たちが自ら考え行動をしていく力を身に付けるために、教育におきましては、知・徳・体に加えまして佐賀への誇りやグローバルな視点を持って、主体的に社会とかかわり豊かさを創造していく人を育成していくことが求められているのだらうと思います。そのために肥前さが幕末維新博覧会の成果を今後につなげて、若者達の胸に佐賀への誇り、何かを成し遂げたいという強い志を育てていくということが必要であらうと思います。こうした思いの元、山口知事と教育委員会が連携・協力して本県におけます、教育、生涯学習、文化・スポーツの振興に関する施策を総合的に推進していくために「佐賀県教育大綱 2019」を策定するものです。

前回の会議におきましては、佐賀への誇りですとか、志ですとか、そういった御意見を沢山いただいております。そういったものもこのメッセージの中に表現させていただいた所です。

資料の 8 ページに、推進にあたっての姿勢ということで記載しています。前回の会議で、教育現場のルールが実態と乖離しないようにと、裏表がないようにしていただきたいという御意見もございました。そういったことから、前段の所で、そういう透明で信頼される教育行政を推進するということを記載いたしまして、後段では、施策の推進にあたりまして、現場・ミッション・プロセスを大切にしていこうということを記載しています。

次の9ページから10ページにかけて、ここでは取組の方向性ということで、大綱に記載する施策の範囲から基本施策名を記載しております。10ページの方が、その一覧になります。施策の範囲は、前回も示しましたがけれども、教育、生涯学習・文化・スポーツ、それに加えて、子育てと雇用・労働の関連施策をもって構成します。雇用・労働関係につきましては、産業人材育成に関する施策の学校教育にかかる部分の対象になりますので、教育分野の所に、溶け込ませた形になっております。従いましては、一覧では教育・子育て・生涯学習・文化・スポーツということになります。

それから、基本施策名につきましては、前回からいくつか変更しております。教育の6番は、教員の質が大事という御意見を多々ございました。そういうこともありまして、教育を支える人材の育成と環境の整備としています。教育の7番では、県内就職を促進するという観点で、産業という所に、佐賀の産業ということで付け加えています。子育ての10番で、前は2つの施策を記載しておりましたが、ここを1本にまとめまして、佐賀らしい取組ということがわかるように、子育てし大県“さが”の推進とさせてもらっています。

次の11ページから15ページにかけて、前回の会議でいただきました主な御意見を施策に反映させておりますので、それにつきまして御説明させていただきます。

11ページでは、「志」、「佐賀への誇り」に関する御意見を多数いただきました。「自分で判断し、自分の足で歩く子どもを育てる教育が必要」とか、「自分で決めるということを教えることが大事」と言った御意見。「教師の一番の仕事が、子どもの心に火をつけることだ」と、「教師の指導力は、重点的に勧めていかななくてはならない」と言った御意見。「どんな力を身に付けさせるかを、授業だけではなく、教育活動の中で考えていけるような教員が必要だ」という御意見もありました。また、「東京と比べた価値観ではなくて、価値観のリフレーミングが必要」と言った御意見ですとか、「小さい頃から、社会に貢献する経験をさせて、なぜ勉強が必要かを考える機会が必要」と言った御意見もありました。こう言った御意見に対しまして、「基本施策1 志を高める教育の推進」の中で、具体的な取組方針といたしまして、児童生徒の夢や目標の実現の基盤となる、知識・技能の思考力・判断力・表現力、主体的な学習態度、こう言った学力3要素の育成を目指して、授業改善や指導力向上などの取組を推進すること。2つ目に、小・中・高等学校の発達段階に応じた郷土学習を推進することにより、ふるさと佐賀への誇りや愛着を持ち、佐賀のよさを語るができる人材を育成すること。また、子どもたちが社会的・職業的自立に向け、自らの生き方について考え、希望する進路を実現できるよう、県内産業界との連携を図りながら、キャリア教育を充実するという。また、海外を含む様々な地域の人々との交流によって、多様な価値観や文化に触れ、広い視野を持ち自分の活躍の場を考えられる人材に育成すること。そういった記載をすることを考えてございます。

12ページでは、「子どもたちだけではなく、親の意識も変えなくてはいけない。県民全体の志を高めていく必要がある」と言った御意見。「維新博では終わらせず、今後も付加価値

を付けて志を高めてほしい」と言った御意見ございました。こう言った御意見に対しましては、「基本施策13 豊かな文化・歴史の継承と魅力発信」の中で、具体的な取組方針といたしまして、維新博により広く県民に芽生えた郷土への愛着と誇りを未来へ繋ぎ広げていくため、引き続き佐賀の偉業や偉人を顕彰すること、ということに記載することといたしました。

13 ページでは、教員の質の向上に関する御意見がございました。『虫の目』、『鳥の目』、『魚の目』の研修が教員の指導力を高めるポイントであるけれども、社会教育に関する研修が不足していたり、多忙なため、先を見据えて改善が出来ていないのではないかと、言う御意見とか、「優先順位を付けた業務の見直し、情報共有できる体制づくり、仕事量の分析などにより働く環境の改善が必要」と言った御意見。また、「失敗してもいい、どう改善していくかを考え、教師も生徒も成長していくことが大事。教員と子どもと一緒に成長していくことに価値がある」と言った御意見もございました。これらの御意見に対しましては、「基本施策6 教育を支える人材の育成と環境の整備」で、具体的な取組方針といたしまして、教員採用選考方法を改善し、優秀な人材を確保するとともに、大学と連携して、指導力のある教員を養成すること、キャリアステージに応じた研修や教育課題に応じた研修などを実施し教員の資質向上に取り組むこと、学校現場における業務改善に取り組むこと、を記載することと考えています。

14 ページでは、県内就職に関する御意見がございました。「就職支援員を中心に、労働局、県、学校が一体となって取り組んでほしい」ですとか、「企業と学校が情報を共有し信頼関係を築く必要がある」という意見。「県外の大企業に就職するということが素晴らしいという考え方を改め、優秀な子どもたちが県内企業に就職すれば可能性がいくらかでも出てくる」と言った御意見がございました。これらの御意見に対しましては、「基本施策7 佐賀の産業を支える人材の確保」の中で、具体的取組方針といたしまして、企業見学会、長期企業実習、インターンシップなどの体験型学習により、職業観・勤労観の醸成を図ることですとか、県内の事業所と学校との更なる連携を図り、高校生の県内就職を支援すること、を記載することといたしました。

15 ページでは、「海外交流を今以上に薦めたらどうか」と言った御意見とか、「特別支援教育が大事だよ」と言った御意見がございました。これにつきましては、「基本施策5 多様なニーズに対応した教育」で、取組方針の所で海外留学ですとか、学校交流への支援、また特別支援教育充実についての記載をすることといたしております。

また、「母国語が日本語でない子どもたちの増加、これらに対応が必要ですよ」という御意見もございました。これにつきましては、「基本施策2 確かな学力を育む教育の推進」の取組方針で、きめ細かな指導による学力向上を目指した学習環境の整備・充実を図ることを記載することといたしまして、合わせまして、総合計画の中でも外国人とのコミュニケーションを深め、豊かな生活を実現できる社会づくりを推進していくと記載をすることとしております。

また、障害者の農福連携に関する御意見もございましたけれども、これにつきましては、教育大綱の中では直接には出てこないのですが、総合計画で障害者の就職支援という所で農福連携推進事業などに取り組んで、就労や工賃向上への支援についての記載をすることを考えております。以上が主な意見に対する対応状況でございます。私の方からの説明は以上になります。

(意見交換)

(林政策総括監)

ありがとうございました。では、ここからは意見交換に入りたいと思います。案につきまして御意見いただきたいと思いますが、どなたか御発言ございませんでしょうか。

(加藤委員)

この施策のどの取組も今の社会のニーズにあった取組案を出していらっしゃるなと思います。それでこの施策の実践というか実行というか、それをしていくことが大事だと思いますけど、そのおおもとして対処療法のようにいたらない、おおもとの子どもたちを育てるという部分が大事だと思います。私たちは、大人と子どもは対等だと思うんですね。先生が生徒を指導するとか、先生が生徒に教えると言うことではなく、私たちが子どもたちからいろんなことを学ばせて貰っていることがたくさんあります。子どもたちが安心して取り組める場所になるためには、子どもたちに失敗していいよって言うことを言ってほしいなと思います。問題があった時に、その子どもたちが、その問題に対してどういうふうに解決したいのかということ、先生たちが一方的にルールを作ってくれたりとか、そういうことじゃなくて、子どもたちがいったい問題に対して「どういうふうに解決していきたいの」という問いかけをたくさんしてほしいなと思います。そうすることで子どもたちが、自分たちが決定したことに対しては自分たちで守る責任があるし、それが持続するのではないだろうかと思っています。ただ、やらされてる感だと、「どうせしなくちゃいけないから」という様な気持ちにもなりますので。

私は主体性とかいろいろ言われていますけど、先生たちもいっぱい問題を抱えていらっしゃるって、うつになったり、いろんな事件が起こっているんですけど、そういう現場で上が決めて、「では、こういうふうにしてください。」というようなことではなく、先生たちが自分の学校をどういうふうにしたいか、自分たちが帰属意識を持って、先生たちも一緒になって考えていける現場だったらいいなと思っています。

どういうふうにありたいかというのは、やはり校長先生とかと話していける現場であればいいなと思いますし、生徒一人一人、先生たち一人一人が、その自分の隣の人のために、自分は何が出来るかということ、一人一人が考えたら、クラスはいいクラスになるし、学校もいい学校になるのではないのでしょうか。要するに、一人一人が隣の人のことを考えて、やってあげる、それがずっと繋がって、一つの集団になるというふうにはなるなと思っています。

いるので、そうやって隣人を愛するっていう言葉があったように、私はそういうふうに繋がっていくんじゃないかなと思っています。

そして、私たちの考えと言うのは、私も子どもたちとすごく年齢が離れているのですが、価値観が古いんですよ。古くて子どもたちの気持ちが分からない時が沢山あるので、その時は子どもたちに何を考えているのかということ聞いていく。自分たちの押し付けではなく、そういうことをもっともっと子どもたちから聞きたいなと思っています。子どもたちのことをもっと知りたい、と言うふうな思いになって、暮らせればいいかなと思います。

そして、特別支援の多様性をということがいっぱい出てきているのですが、多様性というのは特別支援教育だけじゃなくて、全体が多様性を含んでいるということです。子どもたちが生き生きと自分の人生を歩むためには、何を学校は手放したらいいのか、手放すことも大事なんじゃないかなと思います。全部に一概にありきたりなことをしていくのではなくて、個人のことを打ち消すことの方が多いいんですけど、それを更に豊かに個人の特性を広めていく、潜在能力を持ち上げていくにはどうしたらよいかというような、他の誰とも違う感性・特性を認めて、励ましてほしいというふうに思います。生徒のチャレンジを邪魔せず、励ますそんな先生が増えて欲しいなというふうに思っています。

(林政策総括監)

ありがとうございます。本当に根本的な所についての問いかけだったと思います。

(加藤委員)

子どもたちのことを聞いていくと、結局のところ、子どもたちは勉強したいと思っているので、自分が認められて信じてもらえると、勉強も自分たちからしていくんですよ。勉強しろろじゃなくて。だからそういうふうに、根本的な所に目を向けていただけたらなというふうに思います。

(大川内部長)

私は学校現場のことはよくわからないのですが、昨日、ちょうど大隈祭がありまして、早稲田大学の学生さんが来て応援歌を歌ってくれたりしました。その中で中学生、今年は高校生1年生になった子もおりまして、大隈重信の言葉を引用する様な形で、スピーチコンテスト上位3人のスピーチを聞いたのですが、その中の男の子の1人が、「失敗してもいいというようなポジティブシンキングでやっぺいこう」という加藤委員が今仰っていたことと同じことを言っていたのを思い出しました。

また、先週の金曜日・土曜日、ちょうど知事部局、教育長もですが、部局長の研修がございました。学校現場では校長先生がトップですが、県庁組織でいうと我々が各部局のトップなんですけど、そういった所でマネジメントをどうやっていくのかということで、い

ろいろでましたけど、先生からもありましたが、対話があつて、それが会話に発展してそれを議論、さらに発展して最後は討議という所まで、そういう流れがあるなか、こういったものを大切にしながらマネジメントしていかないといけないねと、そういったことも学校現場でもやられていくといい現場になるのかなと思います。

(林政策総括監)

ありがとうございます。他に御意見ございませんか。

(小林委員)

私も大綱の内容については、前回意見交換をさせていただいて、いいものを作っていたなと思います。私は、この推進にあたっての姿勢とありますが、どうして行きたいかというのをきちんと強い思いを書いていたし、知事がよく言われる現場、ミッション、プロセスのところを私も大事だと思っていて、誰の為にやっているのかということや学校の先生はもちろんのこと、県民の方一人一人にもきちんと自分のこととして伝わっていくようにこれをどう県民の方に見せて、伝えていくかという所を考えていただきたいと思います。

加藤委員も言われましたけれども、学校に押し付け、何でも学校の先生に、学校にという風潮があつて、先生方も真面目だから何でも一生懸命取り組んでくださる。その結果、余裕がなくなって本来だったらゆっくり向き合っていける所が、中々できにくくなっているのかなということを見聞きしますので、本当に子どもがいる人、いない人、や子育てが終わった人も、佐賀の子どもと一緒に育てるんだということを、大綱を発信する時に伝えていただきたいなと思います。私からは以上です。

(大川内部長)

せっかく作るので、作ったままではなく、しっかり伝えていかないといいませんね。

(小林委員)

県民のみなさんから「総合教育会議って何」とか、未だにあつて、「こんな話をしているんですよ」とお話をするんだけど、遠くの話の様に、特に県の教育委員会は、みなさんは遠く感じてらっしゃって、でも実は身近な県民一人一人の、子ども一人一人のことを育てることをやっているんだよということが伝わっていく必要があると思いますので、是非よろしくをお願いします。

(飯盛(清)委員)

前回の委員が出した意見をくみ取っていただいて、立派なものが出来上がったこと有難いと思っております。学校の教員だったという立場からの感想といいますか、意見なんで



すが、大綱案のそれぞれの施策の中での取組方針で、文章表現として主語が、佐賀県教育大綱ですから、佐賀県がやり、県教育委員会がやり、もっと拡大していうと市町の教育委員会がやり、そして最後はそれぞれ一人の教員がやりますという意味だと思のですが、果たして、一人一人の先生方がそこまで思っているのかどうかという所が課題と言っているのかどうか分かりませんが、あるのではないのかという気がします。ですから、それを広めていくのは学校長の仕事になるのかなという気もしますが、小林委員もおっしゃった、「みんなでやって行くんですよ。学校側はみんな同じ立場なんですよ。」ということ強く打ち出していく必要があるのかなという気がしております。以上です。

(大川内部長)

私事ですけど、真ん中の娘が県内で小学校の先生をしております、もう本当に実感として、こんなに先生って大変なんだと思いますね。こういった中で、こういったものを現場の先生たちに、どう知ってもらう、わかってもらえるか、腹落ちしてもらう、その辺が大事なんでしょうが、本当に難しいだろうなとも、娘を見ていて思います。先ほどの小林委員の御意見と同じように出来るだけ近づける必要があるように思います。

(飯盛(裕)委員)

個人的に、今年の1月、うちのこども園の担任をしている職員を3名連れて、海外の教育現場を実際に見せるために連れて行きました。やっぱり教育の在り方の違いに気づきは多かったというのがありました。今、幼児教育でも色々な姿がありますが、向こうに行ってみると先生たちが探したのが、アメリカのそういう教育方針がどういうものなのかということでした。アメリカにそういったカッコリした物がないんですよ。先生たちがみんなで作りに上げていくのが教育であって、アメリカの文科省みたいところが教育案というのを下に下げることはあまりなくて、州ごとに違った、日本で言うと県ごとに違った教育の仕方というのがあるようなところが、海外、アメリカのやり方でした。

また、私は高校の時に、佐賀西高に1年通って、その後にヨーロッパの高校に通ったんですけど、やっぱり日本の学校ってものすごくカッコリしすぎて、もう少し生徒らしく学校生活を過ごすことが出来れば、もう少しジレンマというか、学校って楽しい所になって、生徒たちもいじめが少なくなって、不登校も減るんじゃないかなと、感じた次第です。

(山口知事)

前から疑問に思っていたのが、例えば、私立学校は基本的に建学の精神があって同じ先生がずっとやっているの、いろいろな伝統文化がずっと引き継がれています。先生もあんまり大きな異動はありません。ちなみに県立学校は、何年かおきに先生が異動していて、どうやって〇〇高校の精神というものを引き継がれているのでしょうか。先生がこんなに異動する中で、ある部分この仕掛けというのは、県立学校のカラーを作るためには、何と

か指針とか、何とか要領とか、そのようなもので全体を縛っていかないと、ルール化出来なかったようなこれまでの仕掛けみたいなものももしかしたらあるんじゃないかなと思っています。ただ、本当はそれぞれの学校ごとに、上からじゃなくて地域ごとにいろいろ工夫しながら、うちの学校はこういう所を魅力化して行こうみたいなことをやったら、先生が異動になってとかあるのではないのでしょうか。その辺りの想いというか、最近、巖木高校とか太良高校とかは素晴らしいと思うのですが、そういう伝統を進化させてほしいなと思うのですが、どうですか教育長。

(白水教育長)

教育は、基本的にどこでも同じだと私は思います。今、教育委員が言っていたように、教育委員会の施策が学校に下りていき、浸透して、先生たち一人一人が理解をして動いてもらう。教育って何かと考えてみたら、子どもたちができないことが少しでもできる。長い目で育てるという所が学校の先生に大事ではないかと思います。とかく、指示ではなく、教育というのは指導ということで導かなければいけない、ですから、結果的に何かの成果が出てくる。成果が一つの指標だけではいけないし、逆に、金立特別支援に行つて、子どもたちが何か食べられるようになりましたよ。それでも一つ出来ることだと思うんですよ。もう一回やっぱり、子どもたちが色んなことに挑戦させていくのが学校なんですけど、それを支援するのが教員であつて、そこにはいろいろな指導方法があると。教員には何があるかという、出来たというのを子どもたちと喜びを感じる。いろんなことに子どもたちがチャレンジしていく、そういうのを積み上げていく必要があるかなと思います。学校でいろんな目標が、知事が言われたように違うんですけども、それぞれが、そのやらせることは小さいことでも、それぞれ違うんですけど、それが学校ごとに基本方針ありますけれども、学校の中でいかに校長が職員に浸透させるか一つの課題はあります。

(山口知事)

別の言い方をすると、この大綱というものを作りました。これは県が決めてこうやることだからと校長に下して、校長は書いてあるからこの通りやりましょうとやることは、本当にそれでいいのでしょうか。私はそうではないと思つていて、こういうふうには時代も変わっているし、県もこういうふうには大綱に書いて、いろいろ世の中が変わっているところに書いてあるけど、こういうこともしっかりヒントにしながら、みんなで自分たちの現場を見ながら、うちの学校ではどうかということをみんなで意見を出し合ひましょう、となつたら私はいいなと思います。

冒頭に申し上げたのは、こう決まっているから、この通りにみなさん、ちゃんと生徒を指導しなさい、というような部分がこれまで若干あつたんじゃないのでしょうか。それは、日本が右肩上がりになっている時代では必要だったのかもしれませんが。今はそうではなくて、一人一人本当にその多様な中で何かを産み出していく時代だから、大綱の使い方も含

めて、大綱を何も知らないというのは寂しいんだけども、どう扱うべきなのだろうかということも含めて、伝達してあげればいいのかと思います。

(白水教育長)

学校で子どもたちの個性・能力はそれぞれ違うけど、本筋は基本的に無限化した取組をどうしていくか、どう対応していくか、学校で意見を出し合って自分たちの取組を決めていくというふうに思います。

(山口知事)

職員会議ってどんな感じなのですか。みんなが意見して、これ違うんじゃないの、と言いながら話し合うのでしょうか。

(飯盛(清)委員)

決定権は最終的に校長にあって、意見を聞く場となっています。学校の雰囲気にもよるでしょうけど、言いやすい学校だったり、言いづらい学校だったりあると思います。

(白水教育長)

自然に流れている所は意外と盛り上がりませんよ。いろんな問題があって、議論することでうまくいく場合もあります。私も今の太良高校になる時、ゼロからのチャレンジで、議論をしないと、前へ進まない。だけど伝統があって、ある程度流れている所は、それなりにきちっとしていますからいいんですけど。だから今回、高校でも魅力づくりということでやっていますが、そういうことをやろうとしたら、それに対して議論が必要だと思います。ある面では学校が課題認識をもっていかにかやるか、今からこういうのも浸透していくうえで、この課題をして繋がっていくと思うんですけど、会議・研修をやっていけないといけないと思います。

(牟田委員)

私は前から教育委員会で、15歳成人説を唱えています。大人にしていく、勉強ばかりじゃなくて、ちゃんとした大人にすることが大事だなと思っています。知事がよく言ってくれて広まってきた佐賀を誇りに思うということは、大人も思えるようになってきたと思うんですね。まだ、もうちょっと変わっていかないと、勉強ばかりじゃなくて佐賀で生きていくことが楽しい、素敵な所だなと思わなきゃいけないかなと思います。大人になると、仕事をしないといけないですね。だから、各人がしている仕事が役に立っていて、すごくいいことなんだよねって言うことをもって教えてあげられたらいい、と思います。

(山口知事)

確かにそれはわかります。

(牟田委員)

佐賀はすごく暮らしやすい所じゃないですか。この前ゴールデンウィークに2泊3日で東京の友達が来たんですよね。それで佐賀市に泊まって、すごくよかった。唐津もよかった、伊万里・有田もいいし、南に下れば武雄・嬉野もよかった。太良の方も行ったし、干潟も見た。2泊3日じゃ足りないって言う訳ですよね。

そういうことを、我々が実感して、また子どもたちに伝えていく。それが日々の暮らしでも、仕事が大事で、ちゃんとやってるぞと、親父もお袋も、頑張ってるなど、そういうことが実感できる教育になっていけばいいなと思います。あとは、この前も言ったけど、大人の意識が変わらないとダメだと思います。

(白水教育長)

私たちが求めているのは共通していて、それをどうやって学ばせていくかというのが大事だと思うんですよね。そういう中に、子どもを今外に出していくと、自分で動きますし、そこに大人も佐賀の魅力を教えることが大事なんですけど、子どもがどう考えるかということで、共に考えると、逆にそういうのを見て佐賀はこうした方がいいよねというのを、小さい時から希望を持たせるような機会を持っていく必要があるかなと思います。どうやって学ばせていけばいいかなという。学んで、私も中々勉強嫌いだったんですけど、興味関心の話とか、色んな仕掛けを今から考えていくことが大事じゃないかなと思います。

(大川内部長)

今、弘道館2という取組をやっています、前々回は太良でアスパラガスを作られている安東さんという農業をやられている方の話でしたけれど、いろんなそういう職業の方の話も聞けたりだとか、佐賀に対する想いを聞けたりだとか、そういうことも知事部局としてやっていますので、そういうもののアーカイブを学校で使うとか、そういったことも一つ有り得るのかなと思いました。

(小林委員)

我が家の話ですけど、ローカリストというのを県でやっていますよね。その30代の若者に、うちの長男がとても影響を受けて、今、大学4年生なんですけど、県内に就職するって行って県内の企業を見て回っているんですよ。彼のちょっと目上ですよね。父親、母親よりもっと年が近い若者や先輩たちが、本当に佐賀に誇りを持って仕事をやっている。生き生き楽しそうにやっている。とっても魅力を感じていて、そういう身近な人が生き生きするという姿というのを、うちの子も高校生の時に見せてもらったんですけど、偉いなど

思いました。多分、県内に就職する予定みたいで、県内で就職をするって言っています。

(山口知事)

素晴らしいと思います。ローカリストは最初、「何とか県人会」とか、「偉人何とか」という名前だったですよ。それは私がやりたいことと違って、上からの感じがしたので、もっとローカルでその代わりすごくみんなに愛されているような人たちだからと言ったら、「ローカリスト」という名前を出してきたんです。だから、あのような人たちが血と肉になって、佐賀を良くしている。そういう人がいっぱい増えてくると、もっともっと盛り上がっていくと思います。

(小林委員)

私も年下の世代だけど、やっぱり元気をもらって、一生懸命やっけて行こうというのを、もっと上から言われるよりも頑張っている彼らに影響をもらって、しっかりやっけて行こうと強く思いました。

(山口知事)

しかも、ローカリストは県外から来ている人ももちろんいて、みんながいろんな多様性があるようなメンバーがいて、いろんなことをやってくれています。

(飯盛(裕)委員)

佐賀に戻ってくる話ですけど、この間、弘道館2の最後のセッションで海外使節団の帰国報告会だったんですけど、そこにも来た子が、九大法学部を出て、福岡でもいろいろ就職先があったんですけど、佐賀に戻って就職をしたいって決めて、佐賀に就職をした子がいました。やっぱり海外に出て、いろいろ見て影響を受けて、海外でやるんじゃなくて、海外に出たのが実は地域に貢献する人たちの活躍ぶりが凄かったから、私は佐賀出身だから佐賀に戻ってきて、佐賀で働いて佐賀のために尽くしたいと、そういう気持ちになったと聞きました。主催をした側としては、とても誇らしかったです。

(山口知事)

本当に子どもってどういう人と知り合って、どういうふうな話をするかで全然違うと思います。教育というのはあまりにも可能性がこんなに大きくて、だから何か佐賀にこだわって、佐賀を好きになってくれて、いずれは別に30年後でも、50年後でも、70年後でも、どんな分野でも、活躍してもらおうというような大きな流れが出来たら、どんどん、どんどん連鎖反応をして、イノベーションもできますので、素晴らしいすべての佐賀の将来の源流がここにあるんだなと私たちは思っています。

だからあまり知事が、こうしなさいって言わないことだと思って、我慢して、育つまで

待っています。でも、きっと好きは早道だと思います。右向け右の世界の時には、知事がそう言っていたから、こうしなくてはいけないとなるのでしょうか、これからの時代は同じように校長が言ったから、先生が言ったからといっても、待てよ、本当か、というぐらいの気持ちが必要だと思います。

(大川内部長)

ちなみに、総合計画もそうなんですけど、計画期間の4年間の中で見直すべき所は柔軟に見直して行こうという設計にしていますので、これについても、もうすでに半年前のだから古くとなって変えないといけないとか、そういう部分があればこの場を通じて、議論をしていければと思います。

(山口知事)

最近、佐賀県で実業系の学校がますます元気が出てきました。工業、商業とか、農業とかも、たくさんエールを送っていたので。素晴らしいなと思います。人気も出てきているようです。

(牟田委員)

もっと儲かる農業をお願いします。福岡に菊を作ってる方がいて、すごく儲かるんですよと堂々と言われるわけなんです。それで、是非、農業をやってほしいと思います。こういうことやって農業儲かるんだよ、やってごらんよ、という感じで勧めしてほしい。

(山口知事)

今、さが園芸888(はちはちはち)運動を推進していますが、年を取った方はなかなか園芸作物というのは難しいので、先ほど話題に出た安東君とかそういう若い人たちがやってほしいというか、ノウハウも必要だと思います。前回言った農福連携について、若い農家が困っているのは人手不足なんです。企業的経営とかやっていく中で、特に、障害の皆さん方がすごく活躍している例が今増えていて、妙にすごく作業能力が高いそうなんです。

(飯盛(清)委員)

教育を支える人材の育成ということで、義務制の学校は特に大量退職の真っ盛りです。若い人がどんどん入ってきているんですけど、中々語られないことなんですけど、もう少し先の課題として、管理職の極端な若返りが出てくると思います。今のしっかりしているなと思う若者に聞くと、「管理職、教頭、えーとんでもない。あんな大変そうな仕事したくない。」という今の若者の特質もあると思うんですが、教員になったのは、子どもを相手にしているいろんなことをする面白みがあったんだから、そういう仕事のためになったん

じゃないと主張するものが増えてくるだろうなと思います。力量があるのに。だからそこから辺りもキャリアステージにおいた研修ということで、管理職の面白みとか、楽しさとか、そういったものを伝えていく必要があるのではないのかなと思います。ひょっとしたら 40 歳そこそこで教頭とか、もうそろそろでてくるんじゃないかなと思います。

(山口知事)

教頭という仕事は大変なんですか。

(飯盛(清) 委員)

文書量・事務量が大変ですし、保護者の対応とかありますので。

(白水教育長)

組織自体が、働き方が全然違います。そこも合わせて考えていけない時期にきています。今から前へ進もうとする中で、いろんな取り組みを変えていく必要があります。職も色々ありますが、主幹教諭とか指導教諭とかを配置をしています。いろんな問題が前に比べて多くなっているのが事実ですので対応が大変です。

(飯盛(清) 委員)

東京は、教頭のなり手がなから、随分前から教頭や校長退職者を教頭として再任用しています。中々埋まらないです。

(山口知事)

最近、マルチ担任的な主担当・副担当のようなものが増えてきていて、それはいいと言う話も聞きますよね。今まで担任が一人だけって形で担任が神様みただったけど、二人いると、もっとまた多様性の一つになって、こっちに相談したり、あっちに相談したりとできると思います。

(大川内部長)

東京の麹町中学校でしたか、最近担任を置かないとか、中間試験もしないとか、視察が多いと聞きます。

(飯盛(裕) 委員)

1人に集中しないのが、リスクヘッジにもなりますよね。その先生が例えば、精神的に病んで出られなくなったら、他の人がゼロからやらないといけない。

(大川内部長)

子どもたちにとっても、あの先生はちょっと相談しやすいけど、こっちの先生は相談しにくいとかあるんでしょうね。

(白水教育長)

一クラス 40 人が 100 パーセント合う人というのは、中々いないと思います。

(山口知事)

いろいろ相談も人それぞれしたい先生もあるだろうから、マルチシステムみたいなのがこれからどんどん入ってくるのでしょうか。

(白水教育長)

毎回副担任が、授業にも入り、支援も入っているので、一人の先生が一人の子を見るんじゃなく複数で関わっています。支援をしないといけない子も中にはおりますので、私たちの時より組織自体微妙に違います。業務をどう分担していくか、業務の分担についても二人にということはいいことだと思います。

(飯盛(裕)委員)

今後は 10 年で、4 割ぐらいは退職するようになっているそうです。

(山口知事)

今の教職員で 55 歳から 60 歳が大勢いらっしゃるということですか。

(教育委員会事務局)

そういう年齢構成になっております。

(山口知事)

県職員もそうですけど、100 人減ったら 100 人入れる。10 人減ったら 10 人入れるとか、例えば不景気の時には採用しないとか、あれは県もダメだと思います。そういうルールだから同じ人数をずっと採用していく必要があるのに、景気に合わせて民間が苦しい時には県も苦しくなるなど、一緒になって県も絞っています。その辺はもうちょっと慣らし運用するようにやっていかないといけないかもしれないですね。

(飯盛(清)委員)

今の 50 代が多いのは、1980 年に 45 人学級が 40 人学級になって、また、その後まだまだ子どもが増えていましたから、採用がどんどんされたということです。



(山口知事)

60歳を過ぎても再任用とかは結構あるんですよね。その時は校長経験者でも担当に戻って、やってもらえるんですよね。

(白水教育長)

新採の指導にあたってもらったりとかしています。

(山口知事)

何割ぐらい残られるのですか。

(白水教育長)

3分の1くらいだと思います。

(教育委員会事務局)

校長を経験された方は担任よりも新採の指導を望まれます。担任を希望される方はそんなにおられない。確かに60歳過ぎてからだとかツイと思います。

(山口知事)

児童クラブの支援員も足りないんですよね。そういうことをやっていただけたらいいですけど、でも、あれも大変なんですよ。

(白水教育長)

学校にも支援員さんがいるけど中々見つからないときがあって困っています。

(林政策総括監)

そろそろ予定していた時間が近付いてまいりましたが、最後に何か御発言がありましたらお願いします。

(山口知事)

教育大綱については、活用法みたいなものを別途用意できればいいのではないのでしょうか。

(林政策総括監)

今日いただいた御意見では、大体前回の反映をしていただいたという評価をいただきましたが、どういう形で浸透させていくか、受け止めて考えていくのかというところは、これ

からまた工夫していけたらと思います。

また、これからの議会で総合計画を御説明したうえで議論をやっていきますので、総合計画次第で少し書きぶりが変わってくるかと思しますので、その点についてはまた改めて最新をまとめさせていただいて、調整させていただきたいと思います。

では、次回の具体的な日程については、改めて事務局からご連絡申し上げます。これを持ちまして、第14回佐賀県総合教育会議を終了いたします。ありがとうございました。